

# 近代日本版画家名覧 (1900—1945)

## 〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
  - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
  - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
清水久男（大田区立郷土博物館学芸員）	滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
西山純子（千葉県美術館学芸員）	武藤隼人（埼玉県立新座柳瀬高校教員）
森 登（学藝書院）	三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
山田俊幸（大正イマジユリイ学会研究員）	樋口良一（版画堂）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

## 戦前に版画を制作した作家たち (12)

【た】

大雲 (たいうん) ➡ 小村大雲 (こむら・たいうん)

大耕 (たいこう)

土井版画店より戦前作と思われる《〔柳に燕〕》の木版画を制作。【文献】『山田書店新収美術目録』72 (2006 夏) (樋口)

苔翠 (たいすい)

「苔翠」名で、1929 (昭和4) 年に酒井川口合版 (酒井好古堂が制作、川口商会が輸出販売を担当) による《はけいとう》《芍薬》《紫陽花》《ダリア》《朝顔》の木版画5点を制作。また1930年1月26日にニューヨークのフクシマ・ギャラリーで開催された新版画の展示会では、川瀬巴水・鳥居言人・小森素石らとともに犬塚苔翠の植物画6点が展示されたとの記録がある (ケンダール・H. ブラウン「1920・30年代の米国での「新版画」の興隆」『版画学会』43)。苔翠については、一般に「犬塚苔翠」と称されるが、「犬塚」姓の典拠は不明。川瀬巴水の弟子の「犬塚慶次郎」と同一人ではないかという説もあるが、こちらも確認はできていない。なお、犬塚慶次郎は、日本版画奉公会会員 (『日本版画』126では「犬塚慶三郎」となっているが、「犬塚慶次郎」の誤記と思われる) で、当時の住所は東京芝区新橋町6丁目12で、版奉勤労隊の一人として1943年に恩地孝四郎・西田武雄・今純三らと茨城県にある満蒙開拓団内原訓練所への慰問写生会に参加し、内原日輪兵舎を描いた合羽刷の風景画1図を制作している。【文献】『(エッチング改題) 日本版画』126 (1943.7) / 『Ukiyo - e Search』 (<https://ukiyo-e.org/>) / 『日本の版画 V 1941-1950』展図録 (千葉市美術館 2008) / 『版画学会』43 (版画学会誌 2014.5) (樋口)

大道寺 達 (だいどうじ・すすむ) 1912～2005

1912 (明治45) 年5月25日札幌に生まれる。小学校5年生の時、宇都宮に移り、1925年旧制宇都宮中学校入学。ここで美術サークル「パレット会」に入り、同級の川上成多と親しくなったことからその兄川上澄生の存在を知り、澄生を慕う宇都宮中の生徒たちによる版画誌『刀』に創刊時から参加。第1輯 (1928) に表紙および《ローソクと時計》《坂路》、第2輯 (1928) に《雪のある高山》、第3輯 (1928) に《海ヲ眺メテキル人》、第4輯 (1929) に《劇場ノ或ル時》、第6輯 (1929) に表紙および《Fue o fuku Otoko》、第7輯 (1930) に《射的場》を寄せた。1930年に宇都宮中を卒業した後は第一早稲田高等学院を経て早稲田大学理工学部に進み、卒業後は池貝鉄工所で働きながら版画制作を続けた。1940年畑野織蔵を知り、勧められて「造型版画協会」に参加、同年の第4回展に《寒夜 A》《寒夜 B》《海の宝石》、1941年の第5回展に《人魚と漁夫 (連作)》を出品 (1943年に会友推挙)。1941年の新協美術展覧会第5回展にも《海の幻想》(3点連作) を出品するが、戦争の激化につれて制作は停滞した。戦後はディーゼル機関研究で名をなし、1962年に東京大学より工学博士号を受け、同年から長く関東学院大学で教鞭をとり学長も務めたが、木版画への意欲はやまず晩年

まで制作を続けたという。2005 (平成17) 年10月15日東京都大田区にて逝去。【文献】『版画をつづる夢—宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡—』展図録 (宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』 (西山)

大夢庵・大夢一庵写 (たいむあん)

➡小笠原精一 (おがさわら・せいいち)

高川正男 (たかがわ・まさお)

1937 (昭和12) 年に東京の日本橋城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による木版画講習会 (11.25～29 講師: 平塚運一) に参加。講習会の記念として創刊された版画集『日本橋版画』創刊号 (1937.12) に《子供》、第2号 (1938.1) に《コンポジション》を発表。教師対象の講習会だったことから、当時は東京市日本橋区で教職についていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』 (加治)

高木一郎 (たかぎ・いちろう)

東京の文化学院専修科は1933 (昭和8) 年4月から石版や肖像画等の講習会を始め、エッチングについては日本エッチング研究所の西田武雄を講師に招き、第1回を10月に、第2回を11月にそれぞれ1週間開催した。在学中の高木はその第1回講習会に参加。その時制作した子供を描いたエッチング作品が西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第12号 (1933.10) に掲載されている。【文献】『エッチング』12・14 (加治)

高木一夫 (たかぎ・かずお)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校 (現・県立宇都宮高等学校) 在学中に、同校生徒が創刊した版画誌『刀』に第2輯 (1928) から参加し、1929年に同校を卒業するまで作品の発表を続けた。第2輯 (1928) に《風景》、第3輯 (1928) に《蝦》、第4輯 (1929) に《水車ノアル風景》を発表。【文献】『版画をつづる夢—宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡—』展図録 (宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』 (加治)

高木一雄 (たかぎ・かずお)

長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒発行による版画誌『樹氷』第2号 (1940年版) に《水車》を発表。1941年に同校を卒業。『卒業生名簿 昭和25年』には「この時点で死亡」とある。【文献】『樹氷』2 / 『卒業生名簿 昭和25年』 (信州大学教育学部本校 1950) (加治)

高木省治 (たかぎ・しょうじ) 1920～

1920 (大正9) 年1月1日生まれ。須永卯平・伊上凡骨などの細工場で修行後、1934年4月に摺師井上藤吉に入門する。1942年佐藤勘治郎と細工場「桜工芸社」を設立。1943年日本版画奉公会に入会、当時の住所は牛込区改代町で、恩地孝四郎・西田武雄・今純三らと茨城県にある満蒙開拓団内原訓練所への慰問写生会に参加。版奉勤労隊の一人として、内原日輪兵舎の風景を描いた木版画《内原風景》を制作する (『日本版画』132の「寄贈版画目録 (海員報国団)」のリストでは「高木省三」となっているが、「高木省治」の誤記と思われる)。戦後は台東区元浅草に「高木蟹泡堂」を設立し、東京木版画工芸組合相談役などを務めた。弟子に松崎啓三郎・岩瀬孝市などがいる。なお、「日本版画奉公会」に就いては、滝沢恭司 [資料紹介] 小野

忠重旧蔵日本版画奉公会々報、設立趣意書、規約」や西山純子「日本版画奉公会」に詳しい。西山純子氏の調査では、当時理事だった奥山儀八郎がまとめた1冊の画帖『日本版画奉公会供出版画集』（奥山儀八郎控本 1943）があり、今純三・西田武雄・小泉癸巳男・加治春彦・高木省治・犬塚慶次郎・山口進・恩地孝四郎・奥山儀八郎の9作家、ジंक版絵葉書、ジंक版・木版・エッチング・合羽版による一枚摺版画、画稿を含む28点を収録。『日本の版画Ⅴ 1941-1950』展図録には、そのうちの23点が図版入で紹介されている。【文献】『(エッチング改題) 日本版画』130～133／高木省治「昭和初期の木版摺葉界 上・中・下」『浮世絵芸術』65・68・70（日本浮世絵協会 1980・10～1981・10）／西山純子「日本版画奉公会」『日本の版画 1941-1950』展図録（千葉市美術館 2008）／滝沢恭司「[資料紹介] 小野忠重旧蔵日本版画奉公会々報、設立趣意書、規約」（町田市立国際版画美術館紀要 14 2010.3）（樋口）

### 高木武雄（たかぎ・たけお）

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒のための版画講習会を行った。1938年の夏は北海道や青森・北陸などを回り、7月28・29日の両日は北海道の名寄中学校（現・北海道立名寄高等学校）でエッチング・木版画・素描の講習会（講師：西田武雄・武藤完一・小野忠重ほか）を開催。当時、名寄中学校には版画教育に熱心な教諭松田操がおり、自身の版画を制作する一方で、図画教育の一環として生徒へのエッチング指導を行い、研究所機関誌『エッチング』に講習会の受講記や随筆などを投稿している。この年、名寄中学2年に在学中の高木が講習会に参加した記録はないが、松田先生の教えを受けて、銅版画の制作を行ったものと思われる。風景を描いた作品が『エッチング』第75号（1939.1）に掲載されている。【文献】小野忠重「北方記行」、松田操「名寄講習日記」『エッチング』70（1938.8）／『エッチング』75（加治）

### 高木保之助（たかぎ・やすのすけ） 1891～1941

1891（明治24）年東京湯島に生まれる。1901年川端玉章に師事。その後東京美術学校に転じ、1919年同校日本画科選科を卒業。松岡映丘に師事し、映丘画塾の「木之華社」に同人として参加。1921年映丘門下の岩田正巳らによって結成された新興大和絵会に1923年より参加する。この間、第1回帝展（1919）に初入選。第9回帝展（1928）の《はまなすの濱》、翌第10回帝展（1929）の《渚》が連続して特選に選ばれ、1930年帝展推薦となる。その後は帝展、新文展をはじめ1935年に結成された国画院にも同人として参加し、東台邦画会や日本画院にも出品。大和絵の伝統を継ぐ花鳥画を得意とした。1941（昭和16）年8月16日逝去。版画の制作は、新興大和絵会同人時代に、新大和絵の手法による伝統的な日本木版画の再興を図って1927年に刊行された木版画集『日本新名所図絵』（大和絵絵画刊行会 全12図 山岸主計彫摺）に《日光》、翌1928年に刊行された木版画集『大和絵 日本八景』（大和絵絵画刊行会 全8図 小倉四郎彫・西村熊吉摺）に《華巖瀧》の木版2図がある。【文献】岩切信一郎「日本近代版画資料集成（1923～1929）」『東京文化短期大学紀要』（2002.3）／『山田書店新収目録』22（1995.7）（樋口）

### 高倉 昇（たかくら・のぼる）

大分ではじめての版画講習会が創作版画倶楽部主催、講師平塚運一により1931年8月3日から7日に大分県師範学校で開催された。開催を記念して武藤完一は版画誌『彫りと摺り』（1931～1933）を創刊する（編集後記『彫りと摺り』創刊号）。高倉の版画講習会への参加は記録されていないが、その第2号（1931.11）に《日田の横穴》を発表。「太古の古墳だそうですね。気恥ずかしくて一寸画集にのせていただくには躊躇したのですが」と作者言を寄せている。1931年当時、日田郡日田町竹田に在住。その後、『彫りと摺り』は『九州版画』（1933～1941）と改題。1935年8月に同じく大分県師範学校において版画講習会（講師：平塚運一、畦地梅太郎 5日間）が開催され、高倉も参加。その時の作品《厨房一隅》が『九州版画』第8号（1935.10）講習会記念号の表紙絵になった。第11号（1936.7）には《古城春色》を発表する。武藤完一は1936年8月24日に日本エッチング研究所の西田武雄を迎えてエッチング座談会（参加者18名、大分市桜町クラブ）を開催する。高倉も参加しており、当時の所属は大分市高等小学校となっている。【文献】武藤完一「西田先生を迎えての座談会」『エッチング』47号（1936.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

### 高桑了英（たかくわ・りょうえい） 1915～没年不詳

1915（大正4）年〔岐阜県高山市〕に生まれる。本名は渡辺了英か。1935年岐阜県師範学校卒業。武井武雄が主宰する年賀状交換会「榛の会」会員で第6回から第22回（1940～1956）まで連続で出品。第6回（1940）では「渡辺了英」の名前で住所は高山市南校。第7回（1941）以降は第22回（1956）まで「高桑了英」の名前で住所は高山市大新町1-99へと移転。日本板画院東海支部（愛知・岐阜・三重）所属。青山綾子『ひだのわらべうた』（1968.10）の表紙絵と扉絵を版画で制作、木版蔵票の制作などもある。1966年制定の「高山市民憲章」推進起草委員会委員の一人に名を連ねるが、詳しい経歴は不明。【文献】『第21回榛の会ガリ版通信』（1955）／市道和豊『奇跡の成立 榛の会昭和21年-芸術集団の戦中・戦後-』（室町書房 2008）／『広報 高山の文化』169（高山市文化協会 2015.9）（樋口）

### 高澤市郎（たかざわ・いちろう）

創作版画倶楽部を主宰した中島重太郎は《新東京百景》の頒布にあわせて、創作版画への理解と愛好のための情報誌『版画 CLUB』（1929～1932）を刊行する。一般から版画を公募し、誌上に掲載したが、高澤はその第1年6号（1929.12）の「CLUB 紙上展」第4回のB〔二席〕に《散歩》が入賞する。選者藤森静雄は「高澤氏の諸作は大変摺りがキレイでした。只《散歩》と《散髪屋》との2枚でいづれが氏の本領が分らない様でした。《散歩》にはエキゾチックな好みを面白く見ました」と評している。【文献】『版画 CLUB』1-6（1929.12）／『創作版画誌の系譜』（加治）

### 高沢哲夫（たかざわ・てつお）

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』の第1号（1934.9）に《子供》を出品する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

### 高志 譲（たかし・ゆずる）

1935（昭和10）年の第4回日本版画協会展に木版画《利

根川駅》《県庁》《万国橋》の3点が初入選。出品時は横浜に住む。以後、第5回展(1936)に《横浜税関》《横浜弁天通り》、第6回展(1937)に《異人墓地(横浜百景ノ内)》、第7回展(1938)に《河口湖》《井土ヶ谷風景》を連続して出品。なお、姓の読みについては「こし」の可能性もあるが、目録の並び(五十音順)から「たかし」とした。【文献】『第四回日本版画協会展覧会及日本現代版画米国展準備展観目録』(1935)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

#### 高島雲峰(たかしま・うんぼう) 1894～1987

1894(明治27)年5月山形県北村山郡(現・村山市)に生まれる。本名孝蔵。「雲峰」その後「祥光」と号す。1912年県立村山農学校卒業。1915上京して太平洋画会研究所で洋画を学ぶが、1917年に帰郷し、小松雪涯に日本画を学ぶ[この頃より「雲峰」と号したのではないかと思われる]。1919年再度上京して山内多門の画塾に入門。1921年日本大学美学科に入学するが、1923年9月の大震災で閉鎖となる。「雲峰」名で中央美術展の第2回展(1921)・第6回展(1925)、帝展の第8回展(1927)に入選。1933(昭和8)年南画家小室翠雲に師事し[この頃より「祥光」と号したのではないかと思われる]、日本南画院に出品、同院解散後は南画連盟などに出品の傍ら、「祥光」名で第15回帝展(1934)、第6回新文展(1943)、1943年と1944年の陸軍美術展などにも出品する。この間、1940年大東南画院の結成に参加し、委員となる。1945年6月戦災のため山形に帰郷。戦後は山形県内の日本画家グループ「春光会」を主宰し、多くの後進を育てた。1966年第12回齋藤茂吉文化賞を受賞。1987(昭和62)年3月6日山形市で逝去。版画の制作は、近藤紫雲・井川洗屋・柴田耕洋らと競作の木版画集『大正震災画集』に「高島雲峰」筆名で《本所方面(6)》《上野附近(15)》2図の制作がある。なお『大正震災画集』については不明な点がある。まず1924年から1927年にかけて絵巻研究会編で13回に分けて頒布された日本版画社版(袋入で全26図か)と1926年に画帖立で刊行された絵巻研究所版(一般には全25図[山田書店美術部オンラインストアでは26図]、国立国会図書館サーチでは図版28枚となっているが、未見)の2種があり、何図制作されたのが明確でない。また画帖仕立ての絵巻研究所版においては、第10図が井川洗屋《墨田土堤下の惨状》の場合と濱田如洗《火に追われ水に溺る》の場合の2種類ある。以上については、調査不十分で、不明。【文献】『版画にみる東京の風景-関東大震災から戦前まで-』展図録(大田区立郷土博物館 2002)／『齋藤茂吉文化賞受賞者-山形県ホームページ』(2016.5.15) (樋口)

#### 高島祥光(たかしま・しょうこう)

▶高島雲峰(たかしま・うんぼう)

#### 高瀬一成(たかせ・かずなり)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)では、高瀬在学当時の1940年、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』(1928～1932)の再刊を意図して5年生の加地春彦・小松行高らが中心となって版画誌『刀 再版』(1940～1941)を創刊する。4年生の高瀬も第1号(1940)に《歩哨》、第2号(1940.10)に《子供》、第3号(1941)に《いわし》を、5年生に進級後の第4号(1941)に《打者》、第5号(1941)に《ホテル前》を発表。その後、高瀬ら会員の5

年生が卒業すると『刀 再版』の刊行は途絶えた。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 高瀬光治(たかせ・こうじ)

豊橋中学校に勤務する細島昇一らが中心になって1936年9月23日に豊橋中学校で開催した豊橋エッチング協会例会に参加。肖像画作品を制作する。豊橋エッチング協会会員。【文献】『エッチング』47・48(樋口)

#### 高瀬文治(たかせ・ぶんじ)

1933(昭和8)年9月の第3回日本版画協会展に木版画《休日》が初入選。当時、東京に住む。続けて、小野忠重らの「新版画集団」(1932結成)に参加し、同年12月の『新版画』第11号(12.25)に《喫茶店にて》、翌1934年2月の『賀状集 新版画』に《年賀状》を発表するも、4月の小品展(8～12 銀座・版画荘)や『新版画』第12号(4.10)には名前が無いので、短期間で退団したようである。その後は、1935年の第4回日本版画協会展に《フルーツ》《をんな》、翌1936年の第5回展に《ごはん》を出品している。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

#### 高田一夫(たかだ・かずお) 1906～1982

1906(明治39)年4月29日山口県徳山に生まれる。1915年父の日本製鉄株式会社八幡製鉄所就職に伴い、福岡県八幡へ転居。1920年福岡県遠賀郡底井野村高等小学校を卒業。八幡製鉄所技能者養成所に入所し、鉄冶金を学ぶ傍ら、翌1921年4月より油絵を始める。この頃、北川実と交友か。1922年(一説には1924年)同所を卒業し、八幡製鉄所第二製鋼課に勤める。1928年「全日本無産者芸術連盟(ナップ)」の八幡支部に参加するも、短期間で組織から離れた。1931年初めて上京。滞在中は画家として成功していた北川実の世話になる。翌1932年に開かれた第7回国画会展(5.7～24 東京府美術館)の会場で棟方志功を知る。その影響もあってか、6月より木版画を始める。1935年の第12回白日会展に《工場》、第10回国画会展に《霧島山大浪池》が初入選。国画会展へはその後も出品し、第11回展(1936)に《上海 CANNI DROMEの夜》、第12回展(1937)に《鹽焼く家》、第13回展(1938)に《戦跡(上海北停車場)》、第14回展(1939)に《戦跡》《風景湖畔》、第17回展(1942)に《鋼鉄増産図》が入選した。また、1936年の第5回日本版画協会展にも《蘇州迎春橋》《蘇州虎邱山》が初入選。その後も、第6回展(1937)に《製塩場の朝》《坑口》《硬炭山》、第8回展(1939)に《錢塘江岸六和塔》、第9回展(1940)に《熔岩の火口(阿蘇)》、第10回展(1941)に《山と雲》《瀧》、第11回展(1942)に《鋼を汲む》を出品し、1943年には会員に推挙された。その間、1938年に朝日新聞従軍記者の資格で中支の陸軍部隊に約2ヶ月従軍。1942年に八幡製鉄所産業報国会事務局情報掛を命ぜられ、製鉄所時報『くろがね』の編集を担当。翌1943年には「日本版画奉公会」の会員となった。戦後は、1952年に職場の絵画サークル「生活美術協会」を創立し、後進の指導にあたる一方、1955年頃に「日本板画院」(1952年に棟方志功が中心となり結成)の会員となっている。また、1950年代から「民芸運動」に共鳴し、1959年の三宅忠一による「日本民芸協団」の設立に協力。同協団の九州連合会事務局長を引き受けた。1961年八幡製鉄所を定年退職。この年から「日本工芸館小石原分館」

の館長を務めるとともに、民芸品店「民芸の倉」を始めた。1971年には三宅との「民芸」に対する考えの違いから協団を離脱し、「民芸の倉」を拠点に、同年から1978年にかけて民芸研究誌『用と美』17冊を刊行した。1982(昭和57)年2月24日北九州市で逝去。著書に『築炉工小屋原総三郎伝』(東京工業学院 1943)『九州・沖縄の民藝』(栄宝社 1963)『民藝のこころ』(日研出版 1964)などがある。また、『用と美』第18号(1962年秋号、最終号、未見)は高田一夫の追悼号であった。【文献】『日本版画協会会報』36(1944.1)／『高田一夫—美術・民芸・生活—展』図録(北九州市立美術館 2006)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

**高田知明** (たかだ・ともあき) ▶ **浜田知明** (はまだ・ちめい)

**高田芳穂** (たかだ・よしほ)

長野県安曇野地方の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画誌『黄樹』(1937～1938)を発行した。その創刊号(1937.3)に《歌聖》、第2号(1938.5)に《雪》を発表。当時、北安曇野郡池田小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

**高谷佐武郎** (たかや・さぶろう)

青森県師範学校在学中、「青師コバルト会」会員として今純三の指導・影響を受けたひとり、1931(昭和6)年同校卒業後も版画制作を続け、翌1932年今純三・川崎正人を顧問に迎えて、北山秀雄・三上正男・工藤良蔵らと「純羊会」を結成し、同年第1回展を開く。1935年8月21日の西田武雄を講師に招いて木造町で開催された「エッチング座談会」への参加は不明だが、1938年8月5日に西田武雄・武藤完一・小野忠重・林紀一郎を講師に迎えて開催された教員対象の「木造中学校〔版画〕講習会」には参加。当時、西部林小学校教員で、『エッチング』56号(1937.6)にエッチングを始めた頃を回想した「エッチング一年生の所感」を寄稿。59号(1937.9)にエッチング作品《[風景]》の図版が掲載され、70号(1938.8)には木造中学校講習会記「避寒の地に西田先生を迎えて」、76号(1939.2)に「随想録」の寄稿がある。1943年当時は青森県富范国民学校に勤務し、版画奉公会会員に名を連ねる。戦後も青森県の版画教育にかかわり続け、1951年頃多色摺の木版画なども制作しているが、この頃に風間小学校校長となり、版画教育の現場からは離れたという。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979) (樋口)

**高根宏浩** (たかね・こうこう) 1902～1979

1902(明治35)年2月15日東京箱崎町に生まれる。20代で松岡映丘に師事し、大和絵風の日本画を描く。新興大和絵会第9回展(1929)に《早春》、同第10回展(1930)に《うすれ日》、第2回聖徳太子奉讃美術展(1930)に《瓦つくり》、第15回帝展(1934)に《少女復習図》、第6回新文展(1943)に《豊穰讃》などを出品する。その後歌舞伎の舞台美術家となり、6世中村右衛門の作品を中心に、舞台装置図や衣装図などに数多くの作品を遺す。代表作に、「隅田川」「おちくほ物語」「大津絵道成寺」「鱧壳恋曳網」等々。【組上燈籠考】(1971私家版か)の著作がある。1979(昭和54)年4月10日逝去。版画の制作は、戦前作と思われる《杜鵑》(大鈴舎版)、《花時雨》の木版美

人画2図の制作が知られている。【文献】高根昌恵「高根宏浩略歴」(版画堂宛私信 2016.5.27)／『現代画家番附』昭和15年改正版(美術倶楽部出版部 刊年不明)／『山田書店古書目録』11(1988.7)／『版画堂目録』39(1999.12)(樋口)

**高野健介** (たかの・けんすけ)

大分で刊行された版画雑誌『郷土図画』第1巻第5号(版画特別号)(1931.10)によると、1931年8月に大分市で開催された創作版画倶楽部主催の「大分市に於ける版画展」(5～6日 竹町丸吉呉服店階上)に中島重太郎所蔵の版画と同年6月東京で開催された「第1回新興版画展」(創作版画倶楽部公募の版画展:21～25 新宿三越)の出品作品合わせて130点余が陳列され、高野の作品1点も出品されたと記されているが、作品は未見。【文献】『郷土図画』1～5(樋口)

**高野信哉** (たかの・しんや)

長野県下水内郡の小学校教師の集りであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号(1936.7)に《英霊を葬ふ》を発表。当時、下水内郡永田小学校(現・中野市)に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

**高野武郎** (たかの・たけお)

1920年代に音楽・演劇・文学・絵画などで活動していた痕跡を残すが、生没年など詳細は不明。築地小劇場の開設で知られる土方与志は、東京帝大に入学した1919年自宅に小規模ながら舞台設備を備えた「模型舞台研究所」を造り、同研究所に土方久功・齋藤佳三・伊藤熹朔らとともに高野も集い、舞台装置や照明などの研究を行う。翌1920年4月にその研究成果発表のため「模型舞台展覧会」(友達会主催 10～15)を開催する。高野は山田耕筰作曲のバレエ「ケンタワーとニンフ」の舞台場面を制作・発表した。また同年6月に岡田三郎助らの発企で初個展となる「高野武郎氏洋画発表会」(9～13 銀座・資生堂)を、1925年7月に「高野武郎氏素描展」(6～8 銀座・資生堂)を開催する。版画については、三木露風などが発行していた芸芸誌『牧神』(牧神会 1920.10～1921.6 全8冊)の第7号(1921.5?)表紙絵を木版(あるいはリノカットか)で制作している。【文献】『資生堂ギャラリー七十五年史 1919～1994』(株式会社資生堂企業文化部 1995)／『躍動する魂のきらめき—日本の表現主義』展図録(栃木県立美術館ほか 2009) (樋口)

**高野仙吉** (たかの・せんきち)

長野県下水内郡の小学校教師の集りであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号(1936.7)に《雪原》を発表。当時、下水内郡永田小学校(現・中野市)に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

**高野秀雄** (たかの・ひでお)

1929(昭和4)年の第2回プロレタリア美術大展覧会(12.1～15 東京府美術館)に版画《立て飢えたる者よ!》《兄弟心配するな》《工場》《炭鉱夫》《デモ》を出品。【文献】岡本唐貴・松山文雄編『日本プロレタリア美術史』(造形社 1967)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

## 高野正哉 (たかの・まさや)

生没年不詳。彫刻家・中原悌二郎が1906(明治39)年白馬会赤坂溜池研究所入所時期に親しくなった友人に鶴田吾郎・広瀬嘉吉・白山仁太郎・雨宮雅郷とともに高野正哉がおり、後に入所してきた中村彝を入れて親しく交遊。中原悌二郎『彫刻の生命』(中央公論美術出版1993)には、「友人への手紙」で高野正哉宛書簡2通が紹介されている。また、鶴田吾郎の『半世紀の素描』(中央公論美術出版1982)によると、高野は土佐の人で、白馬会研究所以前は川端玉章のところまで日本画をやっていた、1905年に太平洋画会研究所が新設されると、鶴田に続いて高野、更に中原・中村らも太平洋画会研究所へ移り、その頃に撮った写真が遺されている。また、鶴田は大連でロシア人イリヤ・ニンツアと再会し、ニンツアが日本へ行くというので、高野を訪ねるようにと勧めた。高野は1919年ニンツアをエロシェンコが起居する新宿の中村屋に連れて行き、そこで中原悌二郎はニンツアと知り合い、モデルを依頼する。ちょうど療養のため茨城の平磯へでかけて不在だった中村彝のアトリエを借りてニンツアをモデルに代表作となる《若きカフカス人》を制作、未完成のまま同年の第6回院展に出品した。その頃の高野は大井町に住んでいて、「名も知られずに水墨画に異様な感覚を現していた」(松尾信資編『孤高の芸術家 藤井達吉翁』丸善1965)というが、白馬会展や太平洋画会展などへの出品歴は見当たらない。

版画の制作は、1914年1月に開店した三笠美術店の機関誌『藝美』(1914.6～1914.10 全5冊)の第1年第4号(1914.9)と第1年第5号(1914.10)の表紙画カットを〔自画自彫〕木版画で制作する。『藝美』第1年第5号の「消息集」には、「高野正哉画会」を設け、「自画自彫画」による装幀・表紙絵・扉絵・カットなどの依頼に応ずる旨の記事が掲載されていて、申込先は「府下荏原郡北品川260清光寺院内秋庭俊彦宛」、あるいは「荏原郡大井町333山内家別邸高野正哉宛」となっている。また、鈴木三重吉が1915年に刊行した『三重吉全作品集』(全13巻)では、1～10巻を津田青楓、11～13巻を津田に代わって高野が装幀(伊上凡骨摺)を手掛けた。津田は『藝美』第1年第4号に評論、第5号に随筆を寄稿。なお、『藝美』第1年第1号から第3号(1914.5～7)の表紙絵を工芸図案家の藤井達吉が自彫木版画で制作しており、藤井は1936年に上野梅川亭で高野や日本画家の堀田善種・村田龍太郎、相原章二らと絵画・工芸作品の展覧会「伍草会展」を開いている。高野は津田や藤井とも親交があったようだ。そのほか俳句雑誌『ホトトギス』第19巻第10号(1918.7)裏絵《唐辛子畑》の制作や中村彝と親しかった福田久道発行の美術雑誌『木星』第2巻第5号(木星社1925.5)に「或る日」の寄稿がある。【文献】山田光春『藤井達吉の生涯』(風媒社1974)／鶴田吾郎『半世紀の素描』(中央公論美術出版1982)／瀬尾典昭『三笠美術店と近代の工芸について』(『大正イマジユリィ』6 2011.3) (樋口)

## 高羽 敏 (たかば・びん) 1902～1982

1902(明治35)年12月14日徳島県三好郡井川村に高羽家の三男として生まれる。少年期よりエッチングに憧れ、戦前から戦後没年まで一貫して精緻な銅版画を制作した。本名は貞敏(さだとし)。1918年頃より大阪・天彩画塾、1920年頃より東京・本郷洋画研究所で学ぶ。1923年神田・文房堂にて同人らと「赤踏社展」を開催するも、

関東大震災で制作を断念。放浪生活を経て、1924年大阪で兄・貞夫と共に『同心草』創刊。以降、同誌に木版画を発表する。その後、凶案を仕事にする傍ら、西田武雄と出会い1937年頃よりエッチングに着手。1939年の第3回文展《奇礁》入選を機に、1940年紀元二千六百年奉祝美術展に《竹藪》、1942年第17回国画会展に《子供ト石仏構図第三》、1943年同第18回展に《枯蓮》、第3回兵庫県新美術連盟展に《童女》、第6回文展に《草》が入選した。武藤完一との親交から『九州版画』第19～22号(1939.6～1940.11)にエッチングを発表。武井武雄『榛の会』にも1941～1956年まで計7回参加している。1940年「日本エッチング作家協会」創立会員となり、第1～3回展に出品(1940～1942)。また、大阪・阪急でエッチング個展を計3回開催(1940～1943)。その他、1941年高羽が中心となり西田や武藤・中井平三郎・横山信也・西村貞らと「大阪エッチャー小集」開催、1942年西田・神原浩・兼行武四郎と「エッチング展観と講習会」(兵庫・神戸画廊)の講師を務めるなど、戦前の関西エッチング界を牽引した。1943年頃、満州国哈爾濱で個展を開くが詳細不明。1944年新京に移住し、造幣の会社に勤めた。「鷹波三吉」の名による『マンシウコク』(1943.4 日本出版配給株式会社)などの絵本や1944年の第19回国画会展出品作《寛城子の子供達》に中国のモチーフを確認できる。一方この頃、頒布作品集「高羽敏銅版画作品」へ発表の場を移し、『大阪風物』(1944)、1947年大阪吹田市へ引き揚げ後は『満洲風物』(1954)、『埴輪連作』(1970～1971)、『草木虫魚』(1972～1980、計3集)を手がけた。戦後、アクアチントやメゾチントなどの技法も取り入れ、一陽会の第10・11回展(1964・1965)に出品するも、第一線からは退き、独自の制作を続けた。晩年、吹田市の銅版画家西澤静男と親交を深めている。1972年「高羽敏、三上大泉、西村寅 三人展」(大阪・高麗橋画廊)開催。1982(昭和57)年10月13日大阪で逝去。【文献】『履歴書』『エッチング』84／『開館10周年記念展 近代徳島の美術家列伝 明治から第二次世界大戦まで』展図録(徳島県立近代美術館2000)／『今純三・和次郎とエッチング作家協会』展図録(渋谷区立松濤美術館2001)／武藤隼人『高羽敏研究』(自家出版2015)(武藤)

## 高橋水次郎 (たかはし・いちじろう) 1892～1970

1892(明治25)年栃木県に生まれる。川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)の教師として、1922年から1950年まで数学を教えていた。川上先生の版画欲しさから同校生徒が発行した版画誌『刀』(1928～1932)に第7輯から参加。第7輯(1930)に《鍵》、第8輯(1930)に《あやめ》、第9輯(1930)に《海岸の松》、第10輯(1931)に《OMEDETO》、第13輯(1932)に《ランプ》を発表。『刀』に参加する大きな要因となったのは、創刊会員・高橋守の実父であったからと考えられる。その後、『刀』は休刊し、1940年に後輩たちによって『刀 再版』(1940～1941)として再刊されるが、その時も生徒に勧められたようで、第2号(1940.10)に《楓樹》、第3号(1941)に《私の便箋》、第5号(1941)に《妙義の早春》を発表している。その後、版画制作は行っていない。1970(昭和45)年に逝去。【文献】『版画をつづる夢—宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡—』展図録(宇都宮美術館2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

### 高橋勝雄（たかはし・かつお）

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』の第1号（1934.9）に《山と木》、第2号（1935）賀状号に《猪》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

### 高橋キツ（たかはし・きつ）

日本エッチング協会会員中村正雄（松尾鉱業 K.K. の常務取締役）の招致により、私立松尾鉱山小学校（岩手県）において、1937年9月4・5日の2日間、講師西田武雄によるエッチング講習会（5日には青森の今純三が助手を勤める）が開催された。当時、在学中の高橋は講習会に参加したとみられ、その時制作されたバラを描いた作品が西田主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第59号に掲載されている。【文献】女麻卓「受講の記」（『エッチング』59号 1937.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

### 高橋春佳（たかはし・しゅんか）

大正末から昭和10年代にかけて、京都・大阪で活躍。絵葉書図案・図案集の出版、幼年倶楽部の仕事などに携わる。早くは明治末の神坂雪佳の画塾の展覧会に「高橋春佳」名があらわれるが、日本画の肉筆十二月色紙なども残しており、それが絵葉書図案家「高橋春佳」と同一人と思われる。本名は「孝一」か。

絵葉書の版元は主として京都の山口青旭堂。それより先に「ヤマト」という版元での簡単な図案絵葉書の仕事がある。大正期の春佳の足跡はさしたる情報もなく、なかなか辿り難いものの、高橋春佳の編集で出版された図案集にはフランスのデザイン情報が満載されており、それからすると、神坂雪佳画塾の後、あるいはしばらく日本を離れていた可能性もある。ではあるが、その仕事が顕著になるのは、やはり山口青旭堂の絵葉書図案を始めた大正末からだろう。

山口青旭堂での良質な仕事は、主として昭和のものが多く。春佳名の「春」の図案文字を丸で囲んだ一連のグリーティング・カードがそれで、とりわけ暑中見舞絵葉書・クリスマス絵葉書・干支図案の年賀絵葉書が目される。また、そうしたデザイン絵葉書だけでなく、絵葉書袋をデザインしたものも多い。これらは観光写真絵葉書の袋であるので、絵葉書そのものにはサインは無いものの、その一部には、モダンで斬新なデザインを施したものがある。サインが無いので、そのすべてを春佳と確定するわけにはいかないが、銀の図案枠で写真を包むデザイン・スタイルがなかなか魅力的で、これなどは雪佳の元で琳派を学んだ春佳ならではのものだろう。忘れられがちだから、これは記しておく。絵葉書はだいたい4枚組。山口青旭堂は、毎年業者用の『新年用絵葉書・クリスマス用カード総見本』を出していたようで、その「昭和四年」を写す。『高級クリスマス用絵葉書』木版手摺《幸の鐘》《みめぐみの宵》《静けき夜空》《星に祈る》（以上卸価格・100セット18円）。石版《鐘は鳴る》《主のみめぐみ》《聖きみそら》《嬉しき夢》《聖きクリスマス》《クリスマスの喜び》《祈りの幸》《クリスマスの聖夜》《クリスマスの恵》《聖なる灯》《聖き祈り》（以上卸価格・100セット9円）。『高級新年用絵葉書』《巳の新春》《巳の春》《抒情百人一首（第一輯）》《抒情百人一首（第二輯）》（以上卸価格・100セット9円）。8枚組女子用『初だより』男子用『初だより』（以上卸価格・100セット6円）。16枚組『昭和式図案十六種』（以上卸価格・100セット1円20銭）。その他、春佳は枝折り

などの仕事もしているが、戦後の足跡はうかがうことができない。【文献】山田俊幸監修『大正・昭和の乙女デザイン』（ピエ・ブックス 2009）／山田俊幸監修『大正イマジユリィの世界』（ピエ・ブックス 2010）／『エハカキ』（日本絵葉書会報 56 2016.3）（山田）

### 高橋昌平（たかはし・しょうへい）

1942（昭和17）年の造型版画協会第6回展（4.25～5.4 東京府美術館）に石版画《雑談》、翌1943年の第7回展（4.3～11 東京府美術館）に石版画《斥候兵》《鉄牛尖撃》を出品。【文献】『造型版画協会第六回展覧会作品目録』（1942）／『造型版画協会第七回展覧会出品目録』（1943）（三木）

### 高橋太郎（たかはし・たさぶろう） 1904～1977

1904（明治37）年京都に生まれる。1923年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業し、京都市立絵画専門学校へ進学。卒業制作の日本画《風景》は学校の買い上げになっている。1926年絵画専門学校絵画科を卒業。土田麦庵に学ぶも、時期は不明であるが永瀬義郎の影響を受け木版画に転じたという。1928年の第9回帝展に木版画《玉乗り》が初入選。その後も1934年の第15回展に《道頓堀夜景》、1941年の第4回新文展に《静物》を出品。また、1935年の第4回日本版画協会展に《花》が初入選。翌年の第5回展にも《静物》を出品した。その間、京都においては1929年の「京都創作版画協会」の結成に参加し、第1回展（2.1～5 京都大丸）に《支那人形》他1点、第2回展（会期不明）に《牡丹》《人形》《海の幸》を出品。また、「新樹社」にも参加し、1930年の第2回展（6.7～9 京都市第二勸業館）に《赤い卓の上の静物》《人形》を出品。続けて、公募展である京都市工芸美術展の第4回展（1933）・第6回展（1936）などの他、京都市展の第1回展（1935）に《花》、第2回展（1937）に《湖畔新緑》が入選。1936年には京都の武田新太郎、大阪の島田要・中田一男、神戸の神原浩らと「関西版画協会展」（5月上旬 大阪、心齋橋・大丸）を開催しているが、詳細は不明である。戦後は、1948年に亀井藤兵衛・琴塚英一・徳力富吉郎と「紅緑社」を結成。1949年の井上豊久展（4.29～5.3 京都・丸善画廊）に紅緑社のメンバーと賛助出品。1951年には徳力らと「京都版画協会」を結成した。1977（昭和52）年11月11日京都市で逝去。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）／『京都の近代版画—円山応挙から現代まで—』展図録（京都市美術館 1996）／『百年史 京都市立芸術大学』（1981）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

### 高橋忠雄（たかはし・ただお）

愛知県半田の小学校教員で、1931（昭和6）年7月に平塚運一が講師を務め、愛知県半田市亀崎第一尋常高等小学校で開かれた版画講習会に参加したと推定される。その後、9月の第1回日本版画協会に木版画《亀崎風景》が初入選。また、平塚の講習会参加者によって組織された「版刀会」（1928.7 発足か）が発行する版画誌『運』の第5号（1931）に《暑中御伺》（《草花》）、第6号（1931）に《蔵書票》、第7号（1932）に《方寸版画（6点）》《蔵書票》を発表した他、1932年の『版芸術』第9号（1932.12）の「全日本版画家年賀状百人集」にも《年賀状》を発表している。1933年7月には、亀崎第一尋常高等小学

校で開かれた平塚の第3回版画講習会に参加。平塚や受講生による『三河国矢作川ガラ紡水車船版画集』（版刀会30部限定）に作品を寄せた。また、同年9月の第3回日本版画協会展に《七本木池》《濁池の畔》を出品。1935年4月には長野県須坂で発行されていた『櫟』第6輯に《年賀状》（画面の住所は「亀崎」）を発表している。その後、時期は不明であるが兵庫県明石市の小学校への異動があったものと思われ、1939年の第8回日本版画協会展に《明石公園》《編物》《影》、1940年の第9回展に《工作》を出品。また、1941年秋には平塚の主宰する「きつつき会」の結成に参加。1942年の第1回きつつき会版画展（7.21～25 銀座・青樹社）に《亀崎風景》《舌切雀》を出品し、出品作を集めた版画集『昭和十七年版きつつき版画集』（8.25）にも《舌切雀》を発表した。なお、この時の会員名簿の住所は、「明石市外林崎村船上二丁目七八」とある。その後の活動は不明である。【文献】『第一回きつつき会版画展出品目録』『きつつき会々員名簿』（1942）／『加藤祐子「平塚運一による版画普及活動の一端：版画講習会開催とその余波－愛知県半田市亀崎を例に－」』『版画家・平塚運一の世界展－版画三昧 画業80余年の軌跡－』（高浜市きもの里かわら美術館 2003）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

#### 高橋忠弥（たかはし・ちゅうや）

1912（明治45）年4月25日東京市神田区松住町17番地（現・千代田区外神田）に生まれる。1919年北海道空知郡砂川村に移住。1922年母の郷里の岩手県盛岡に転居。1927年岩手県師範学校本科一部に入学。哲学・文芸・美術に興味を持ち、同人誌を主宰する。1928年に母を亡くし、この頃より独学で油絵を描くようになる。1933年同校を卒業し、4月から九戸郡軽米尋常小学校に勤務。1931年に盛岡で開催された第1回全岩手県美術展に出品。1933年第3回独立美術協会展に《植木屋》が初入選。1938年第8回展での《孫作沼》の入選、以後は白日会などにも出品するようになる。1943年には第13回独立美術賞を受賞。1963年の第31回まで毎年出品するが、1969年に退会。版画関係は青森の佐藤米次郎が発行した『趣味の蔵書票集』第2回（1937.8）に木版画の蔵書票《緑瑤清爽善少女》、リノリウム版《無題》を発表する。1937年2月16日付の岩手日報文芸欄に「教官記」を執筆したが、この内容が波紋を呼び、教職を追われる事由となる。高橋はこれを契機に盛岡を離れることを決心し、世話になった人々へ記念品として詩集『蟻』を自費出版。4月には版画集『版心』第二集、12月には『版心』第三集を出版。10月に盛岡で「高橋忠弥絵画抄展」（味のデパート多賀10.30～11.14）を開催したのに合わせて、『銀河鉄道』（版画3点 随筆2点 限定150部）を出版する。翌1938年8月盛岡市中野小学校を退職。9月に上京し、渋谷区千駄ヶ谷町に住まいを移す。この頃から同郷の松本俊介や澤田哲郎との交友が始まる。1941年雑誌『改造』特派員として中国に渡り、翌年には中国の「江蘇日報」の客員となる。1944年中国から帰国。戦後は美術団体連合展、日本国際美術展などの公募展や個展などで精力的に活動する。そのほか、師範学校時代から手製の詩集や版画集などを出版していたことから、上京後は、詩やエッセイ・技法書などを執筆。また、昆虫や鳥のイラストは人気を集め、グラフィックデザイナーとしても仕事が増え、挿絵やブックデザインでも活躍した。著書に『西洋絵画の話』（角

川書店 1954）、『高橋忠弥随筆選集』（ビーイー K.K. 1990）などがある。2001（平成13）年1月24日逝去。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／藤富康子「筆禍事件」『月と車 高橋忠弥の世界』（あざみ書房 2007）／『詩情の楽園 高橋忠弥の世界』展図録（萬鉄五郎記念美術館 2007）／『版画堂』目録99（2013.3）（加治）

#### 高橋長幸（たかはし・ちようこう）

長野県師範学校一部5年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第1号（1938）に《寮門》を発表。【文献】『樹水』1（加治）

#### 高橋十二（たかはし・とうじ）

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第2号（1935）賀状号に《朝陽》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 高橋 徹（たかはし・とる）

大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第24号（1941.12）に掲載の会員名簿に名前があるも、版画作品は掲載されていない。当時、大分県西国東郡呉崎校に所属。【文献】『九州版画』24（加治）

#### 高橋松亭／弘明（たかはし・しょうてい／ひろあき）

1871～1945

1871（明治4）年1月2日浅草向柳原町（現・台東区浅草橋）に生まれる。本名松本勝太郎。父松本正泰の兄で日本画家松本楓湖に就き、9歳頃から日本画を学ぶ。高橋家の養子となる。松本姓に関連する「松亭」号は、伯父で師匠の楓湖が与えたと考えられる。15・16歳頃から宮内省外事課勤務、宮中使用道具類や外国勲章の写生、役人の通常服や大礼服の改正用スタイル画を制作する。1889年頃から十数年間、教科書・雑誌・新聞等の挿絵を描く。1895～97年保助会『奉公偉績畫巻』で広く名を知られるようになる。その後、古錦繪商前羽商店で浮世絵複製版画制作の線書き・色差しに携わる。ここで1906年夏「尚美堂」を開店した渡邊庄三郎と知り合い、その浮世絵複製版画に代るオリジナル「新作版画」制作で彫師近松於菟春、摺師斧由太郎と共に絵師として関わり、1907年春、輸出用に日本の特徴を強調した山水人物等を三切判版画として試作、最初の作品「墨田堤の夜」他、約10図を制作した。庄三郎はこれらを外国人が集まる避暑地軽井沢の松本骨董店で反応をみるために試し売りをするが、意外な程の売行きで庄三郎をにっこりさせたという。以後、松亭は関東大震災までに大小500図以上を制作し、このなかには「佳恵」号で制作した作品もある。「新作版画」の成功は版元渡邊庄三郎の経済的基盤を確立し、庄三郎の目指した新版画制作に必要な資金調達にも貢献、「新作版画」の成功あって新版画が誕生したともいえる。1921年、当時病気がちであった自身の健康を祈念して「弘明」と改号、その後も海外で知られた「松亭」を併用。1921～22年新版画『都南八景』『雪月花』制作。関東大震災の約半年後、庄三郎は彫師・摺師を呼び寄せ、震災前の「新作版画」を弘明等に描き直させて再版し輸出、版元の再建を進めた。そのため松亭版画には同じ絵柄で微妙に異なる震災前と後の作品が存在することになった。再版作品では無題作品に題名を付け、摺色は渋さより華やかさが強調されるようになり、画風は明快率直化するなどの



変化がみられる。これら作品の売行きが好調であったことに眼を付け、松亭版画の贋作を「華月」「北斎」「明雪」などの号で制作した版元に対し、庄三郎が訴訟を起こしている。昭和に入ると版元芋水画房で富士山、日光の風景画と裸婦・猫などの新版画を制作、江戸時代浮世絵の複製版画制作監督もする(1929～32頃)。タナカ版(尚美堂、田中尚美堂、東京尚美堂とも)で三切判、はがき判、ミニチュア判を多数制作(1930～40頃)。版元美術社で『新興版画 短冊十二ヶ月』出版。なお松亭は版画制作の最盛期、明治末期～大正初期頃から昭和初期(1931年は大田区東矢口に居住)まで市野倉(現・東京都大田区中央五丁目)に居住、1922年『都南八景』《市の倉》や1927～35年「市ノ倉弘明画房」に描かれている茅葺屋根の家はアトリエとして使われ毎日版下絵を描いていたという。1945(昭和20)年2月11日上神明町(東京都品川区)で風邪をこじらせ肺炎を併発し逝去。墓所は寿松院(台東区鳥越二丁目13番所在)。**【文献】**清水久男「高橋松亭(弘明)」『浮世絵芸術』149(国際浮世絵学会 2005)(清水)

#### 高橋 守(たかはし・まもる) 1914～1998

1914(大正3)年栃木県大田原町(現・大田原市)鹿畑に生まれる。6歳のときに宇都宮に転居。1927年川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)に入学。在学中は美術サークル「パレット会」に所属し、油彩画や水彩画を制作。1928年川上先生の版画ほしさに同校生徒の長谷川勝四郎らが中心となり版画誌『刀』(1928～1932)を創刊。「パレット会」には川上の実弟成多がおり、版画家としての川上澄生を認識していたと考えられ、「パレット会」会員の多くがこの版画誌『刀』に参加した。高橋もそのひとりで、1931年に同校を卒業するまで、同人の中で一番長く関わり、創刊号から12号(1928～1931)まで発表を続けた。その第1輯(1928)に《風景》、第2輯(1928)に《海辺》、第3輯(1928)に《静物》、第4輯(1929)に《海岸風景》、第5輯(1929)に《風景》、第6輯(1929)に《静物》、第7輯(1930)に《洋燈》、第8輯(1930)に《風景》、第9輯(1930)に《日立鉱山》、第10輯(1931)に《古い幻燈機》、第11輯(1931)に《白樺》、第12輯(1931)に《日光風景》を発表。また在学中から創作版画に関心を持ち、作品を収集するなど興味を示した。卒業後は桐生工業専門学校(現・群馬大学工学部)に入学し、そこで木版を用いた図案画を多数制作している。戦後は鹿沼市で中学校の理科、数学の教師を勤める傍ら、油彩画、水彩画のほかに、川上澄生が会長を務める「鈍刀会」に所属し、生涯版画を制作。1961年頃からはガラス絵も始めている。実父の高橋市次郎は宇都宮中学校教師で、守の影響からか版画誌『刀』やその後再刊された版画誌『再刊 刀』(1940-1941)にも版画を発表している。**【文献】**『版画をつづる夢—宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡—』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜(加治)

#### 高橋友鳳子(たかはし・ゆうほうし) 1899～1996

1899(明治32)年秋田県雄勝郡西成瀬村(現・増田地区)菅生に生まれる。本名は友蔵(ともぞう)。1915年から1943年までは西成瀬村吉乃鉱業所に勤務し、退職後は東京電源工業社に入社。1945年の終戦時に帰郷。1947年西成瀬村村長を2期、1955年町村合併にともない、1956年より増田町教育長を1972年まで務める。1996(平成8)年逝去。若いころより俳句を安藤和風・石井露月に、和

歌を若山牧水に学び、「アララギ」に所属。特に俳句では俳人協会、俳文学会の同人となり、県内外で名が知られた。これら、地域の文化活動に対して、文部大臣表彰、県芸術文化賞が授与された。また、蔵書家としても知られ俳文学・豆本・民俗学類の蔵書には稀覯本も多い。秋田県豆本の会会長も務めた。また、蔵書票にも関心を寄せ、青森の佐藤米次郎が夢人社から発行した『サトー・ヨネジロー蔵書票集』[第3年]1 春の集(1936.5)に蔵書票の《紋章》を発表。その後、『趣味の蔵書票集』(夢人社発行)第1回(1936.9)に《自画像》、第2回(1937.8)に《草花》を発表する。佐藤米次郎は当時朝鮮仁川に渡っていて、京城府の三越ホール(1941年10月16～19日)で開催した蔵書票展覧会は、小品版画展覧会でもあり、高橋の作品も平塚運一など現代版画家の作品と共に展示された。日本版画奉公会会員(1943.8)。著書には『句集 落穂』(書物展望社 1941)、『友鳳子定本句集』(高橋友蔵 私家版 1986)等がある。**【文献】**佐藤米次郎「蔵書票展覧会を終へて」『エッチング』108(1942.1)／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／ネット資料『豆本と書票の世界』(加治)

#### 高橋義男(たかはし・よしお)

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第9号(1932.12)全日本版画家年賀状百人集に年賀状を発表。**【文献】**『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 高久弥太郎(たかひさ・やたろう)

札幌の北海道帝国大学の学生やその仲間は、詩・版画・演劇の同人誌『さとぼろ』(1925～1929)を創刊。その第4号(1925.9)に《上代痴魚一図》を発表。第2巻4号[通巻10号](1926.5)の表紙絵、裏表紙、扉と第3巻1号[通巻11号](1926.7)の扉の彫りを担当する。**【文献】**『「さとぼろ」発見 大正昭和・札幌芸術雑誌にかけた夢 資料集』(北海道立文学館 2016)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 高見 学(たかみ・まなぶ)

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年学校の夏休みを利用して教師や生徒のためのエッチング講習会を行った。1936年8月12-13日には福岡県若松市の田中博主催により、八幡市幼稚園にてエッチング講習会(講師：西田武雄)を開催。当時福岡県八幡高等女学校(現・福岡県立八幡中央高等学校)の教師であった高見も生徒と共に講習会に参加する。その時の作品は未確認だが、講習会についての感想を「エッチング雑感」と題し『エッチング』第47号(1936.9)に寄稿している。**【文献】**『エッチング』47(加治)

#### 高見澤遠治(たかみざわ・えんじ) 1890～1927

1890(明治23)年11月19日日本橋横山町の裕福なメリヤス問屋の次男として生まれる。幼時から絵に長じ、慶応義塾普通部ではパレット倶楽部に所属。洋画を志して水彩画に熱中し、太平洋画会研究所にも通うが、家が傾く頃画業を断念。幼少より好み、収集もしていた錦絵の直しを生業とする。制作当時の紙を用いるなどして欠損を補い、古色も完璧に再現して名人と謳われたが、直しと知らずにフランク・ロイド・ライトが入手したことや、時に直しを逸脱して改作に及んだ事実が三原繁吉の入手した鈴木春信の作品から世に知れるなどして、贋作者と

みなされ、直しから手を引き、1918年頃より複製に転向する。同年弟の上村益郎と吉田幸三郎を世話役にして浮世絵保存刊行会を企画、当時市場から消えつつあった優品を今に伝えるものとして好評を得た。複製においても古色を忠実に再現するという立場をとり、偽作との境界線はあいまいだが、原画よりも美しい複製として支持する人も多かった。そのひとりが親交のあった岸田劉生である。また劉生にとって遠治は、浮世絵や歌舞伎、小唄といった江戸趣味への導き手としても重要である。関東大震災後は大阪へ移り、主にだるま屋を版元に仕事を続けた。1925年に松方コレクションの浮世絵複製を岩波書店から刊行する大きな企画が持ちあがるが、結核を発症して断念。翌年鎌倉へ移り、1927(昭和2)年6月11日鎌倉市にて逝去。遠治の複製技術はふたりの弟、上村益郎と高見澤忠雄に受け継がれ、ふたりは遠治の没後「高見澤木版社」を立ち上げた。また、従弟には高見澤仲太郎(路直・田河水泡)がいる。【文献】高見澤たか子『ある浮世絵師の遺産-高見澤遠治おぼえ書-』(東京書籍1978)／「[巻頭特集]古画を愛したふたり 劉生の撮取遠治の再生」『芸術倶楽部』Vol.27(1998.7-8)／高見沢たか子「浮世絵複製の天才高見沢遠治のこと」『芸術新潮』45-6(1994.6)(西山)

#### 高見沢路直(たかみざわ・みちなお) 1899～1989

1899(明治32)年2月10日東京府東京市本所区本所(現・東京都墨田区立川)に生まれる。本名は仲太郎。出生直後に母が死亡、父が再婚したために伯母夫婦に育てられた。尋常小学校卒業後は菓屋やメリヤス屋で奉公する。1917年頃、浮世絵の複製版画の仕事をはじめた従兄の高見沢遠治の頒布会の仕事を手伝った、さらに遠治から絵具道具一式を買ってもらったとされる。1918年徴兵検査に合格し入営、その後朝鮮や満洲で軍隊生活を送り、1921年12月除隊。1922年10月開催の三科インデペンデント展に出品し、大正期新興美術運動に参入した。1923年8月の住谷磐根作品をめぐる「二科落選移動展」(詳細は住谷磐根の項を参照)に、マヴォのメンバーとして参加したと回想している。同年11月、東京のカフェヤレストランなど20か所ほどで同時開催したマヴォ第2回展に出品。1924年には、4月にマヴォ同人として帝都復興創案展に、6月に、喫茶店鈴蘭で前月からスタートした一人10日間程度のリレー形式の展覧会「マヴォ意識的構成主義的連続展」に、12月に画廊九段で開催の「マヴォ作品展」に出品したほか、9月にカフェどんたくで「マヴォ意識的構成主義展覧会高見沢路直個人展」を開催して、前衛作品を盛んに発表した。その一方で、6月開催の帝大基督教青年会館でのチエルテルの会で「サウンド・コンストラクター」によるパフォーマンスを演じ、さらに7月創刊の『マヴォ』誌第3号掲載写真のための裸体や女装によるパフォーマンスを演じた。また、同誌には構成物の図版や詩のほかリノカットによる版画(2号、7号[1925年])、コラージュ(3号)、スタンプ・ドローイング(4号)を掲載し、さらにリノカットを収めた「マヴォ・グラフィック」を発行して紙上の仕事でも前衛作品を果敢に発表した。このうち第3号掲載のコラージュは火柴を使用したもので、この作品が原因でこの号は発禁処分を受けた。1925年には4月開催の「第2回無選首都展」や9月開催の同第3回展、三科第2回展(公募展)に出品した。三科が解散(1925.9)し、村山知義がマヴォを脱退して新興美術運動の熱が急速に冷めた後も岡田龍夫らとマ

ヴォをなのり、1926年5月の横井弘三主宰「理想大展覧会」に出品したり、9月開催の大阪での「築地小劇場 マヴォ作品舞台模型 映画セット展覧会」に出品したりした。また同月京都で開催された「マヴォ創作舞踊発表会」でダンスを演じた。1927年に日本美術学校図案科を卒業(卒業生名簿による。入学は1922年とされるが未確認)。その後、新作落語の作家として活躍中に高見沢をもじった「田川水泡」(たかみざわ)の名で漫画の執筆に取り掛かり、まもなく「のらくろ」の田河水泡として大活躍した。戦後、1951年より関野準一郎に学んでエッチングを多数制作した。妻は小林秀雄の妹・潤子。弟子の漫画家に長谷川町子や杉浦茂などがある。1989(平成元)年12月12日逝去。【文献】『追悼 田河水泡展図録』(町田市立国際版画美術館1990)／『のらくろ 田河水泡一生誕百年記念展図録』(町田市立博物館1999)／『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会2006)／『滑稽とペーソス 田河水泡“のらくろ”一代記展図録』(町田市民文学館ことばらんど2013)(滝沢)

#### 高村真夫(たかむら・まさお/しんぶ) 1876～1954

1876(明治9)年8月18日新潟県長岡に生まれる。本名正男。1899年上京して小山正太郎の不同舎に入門。1902年太平洋画会の創立に参加し、以降は太平洋画会の中心画家の一人として活躍。また1907年東京府勧業博覧会に出品した《黄檗の僧》が3等賞受賞。第1回文展(1907)の《画室の沈黙》、第2回文展(1908)の《夏の椽》、第3回文展(1909)の《停車場の夜》が連続して3等賞を受賞する。1914年から1916年まで渡欧。帰国後は太平洋画会研究所で後進の育成にあたる(後に「太平洋美術学校」と改称)。1928年帝展無鑑査となる。『洋画講義 肖像画講義』(日本美術学院1900)、『西洋画の描き方』(日進堂書店1919)、『欧州美術巡礼記』(博文館1917)などの著書や不同舎旧友会記念事業として1934年刊行の『小山正太郎先生』では中心となって編集に関わった。1954(昭和29)年11月21日長岡で逝去。版画については、太平洋画会の仲間たちとの写生旅行の成果をまとめた『瀬戸内海写生旅行』(興文社1911)、『十人写生旅行』(興文社1911)の挿絵、太平洋画会内に設置された日本新版画協会が1936年に刊行した『新時代版画集 前輯・後輯』(石川寅治・吉田博ら全12図)の『後輯』に木版画《京の舞妓》1図を制作。その他に『中央美術』第5巻第3号(1919.3.1)に「日本創作版画協会展覧会評 木版、石版、エッチング」の寄稿などがある。【文献】『もうひとつの明治美術-明治美術会から太平洋画会へ』展図録(静岡県立美術館ほか2003)／『日本の版画IV 1931-1940』展図録(千葉市美術館2004)(樋口)

#### 高村豊周(たかむら・とよちか) 1890～1973

1890(明治23)年7月1日高村光雲の三男として東京に生まれる。高村光太郎は長兄。1908年父のすすめで当時東京美術学校助教授だった津田信夫の弟子となる。翌1909年美校鑄金科に入学するが、授業に疑問をもち独自に研究を進めた。1914年津田信夫・香取秀真・山本安曇らと「青壺会」を結成。1915年美校鑄造科を卒業、この年美校卒業生らと「黒耀社」を結成した。1919年岡田三郎助・長原孝太郎・藤井達吉らと装飾美術家協会を結成、実用性と芸術性をあわせ持つ工芸を求めて制作した。1921年第9回農展に出品し宮内省買上げとなった。1922年工芸普及を目的に渡辺素舟らと『工芸通信』を創刊し、

編集を手がける。1926年には帝展工芸部新設運動の一環として「日本工芸美術会」を結成、檄文を書いた。またこの年、内藤春治・北原千鹿・山崎覚太郎・広川松五郎らと「无型」を結成し、新しい工芸運動の拠点とした。1927年の第8回帝展で工芸部が設置されて出品、特選を受賞。その後、第9回展・第10回展で連続して特選を受賞した。1935年帝展の工芸の在り方に不満を感じ、「用即美」を掲げて「实在工芸美術会」を結成した。1938年より1940年にかけて朝鮮や満洲をたびたび訪れた。さらに1940年から翌年にかけて、メキシコとアメリカを訪問した。戦後は日展に出品し、審査員や理事などを歴任した。1964年には重要無形文化財技術保持者となった。版画の仕事は少ないが、1927年に无型が創刊したパンフレット『无型』の第4号・第6号（共に1928年発行）の表紙を幾何学的図案の木版画で飾っていることが知られる。また、『中央美術』8巻1号（1922.1）の表紙を、壺の図案の木版画で飾っている。東京美術学校在学中に与謝野鉄幹・晶子に師事して短歌を学び、生前『露光集』や『歌ぶくろ』などの歌集を発行した。1973（昭和48）年6月2日逝去。【文献】高村豊周『自画像』（中央公論美術出版1968）／『生誕110年記念 広川松五郎・高村豊周展図録』（新潟県立近代美術館 2000）（滝沢）

#### 高森捷三（たかもり・かつぞう）1908～1977

1908（明治41）年2月22日石川県鳳至郡輪島町に生まれる。元一水会会員。1925年画家を志し上京、林重義に師事する。翌1926年の第13回二科展に《風景》2点が初入選。以後、1929年の第16回展まで連続出品した他、日本水彩画会展や中央美術展（1927・1929）にも出品。また、1928年には「1930年協会洋画研究所」に入り、同協会が主催する第4回展（1929）と第5回展（1930）に出品したが、1930年には日本美プロレタリア美術家同盟に参加。同年の第3回展に油彩画《被告会議》《工場風景》など6点、翌1931年の第4回展にも油彩画《東セルの兄弟しつかりやろう》を出品したが、第3回展の《被告会議》は撤回となった。1932年に日本共産党員になるも、同年検挙され1934年出獄。1936年に再び二科展（第23回展）に出品したが、翌1937年からは新結成された「一水会」に出品するようになり、同年の第1回展から1939年の第3回展、1941年の第5回展に入選した。戦後は、1946年に同志と「現実会」を組織したが、1948年解散。1950年から再び一水会展に出品するようになり、1951年の第13回展で会員となるも、1968年頃に退会した。なお、高森の版画作品は未見であるが、小野忠重は「昭和四年から七年までプロレタリア美術運動に参加。この頃木版作品がある」（『原色 浮世絵第百科事典 第十巻』）とし、作品例に《街上労働》（1930）を挙げている。1977（昭和52）年3月21日東京で逝去した。【文献】小野忠重「たかもり・しょうぞう 高森捷三」『原色 浮世絵第百科事典 第十巻』（大修館書店 1981）／『日本美術年鑑』昭和53年版（東京国立文化財研究所 1980）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

#### 高安やす子（たかやす・やすこ）1883～1969

1883（明治16）年8月1日岡山の医師清野勇の次女に生まれる。幼時、大阪に移住し、堂島高女を卒業。大阪市東区道修町の高安病院院長・高安道成に嫁す。子息は歌人の高安国世。道成の兄は文学者の高安月郊。やす子は月郊の影響を受けて文学に親しみ、竹柏会を経て、与

謝野鉄幹、晶子に師事し、やす子を中心とした大阪の上流夫人・令嬢等によって紫絃社を結成、才媛の関西女流歌人として存在する。小林天眠（政治）と共に、与謝野夫妻の大阪での有力な後援者である。1921年には、与謝野鉄幹が序文を寄せた歌集『内に聴く』を、長谷川巳之吉の第一書房の前身である玄文社詩歌部から刊行する。日夏耿之助の『転身の頌』を意識した装幀で、その見返し及び口絵に自刻木版《海》《森の藤》と題した初々しい版画、油絵・素描を掲載している。書名は巻頭に配した「火の如き花限りなく聞く音つねに／われ聴くわが内に聴く」と詠んだ明星派風の短歌による。その後、斎藤茂吉に師事し、「アララギ」同人となり、1941年『樹下』（アララギ叢書95）を刊行。1969（昭和44）年に芦屋で逝去。【文献】「大阪出身の新人物」（『現代』第5巻3号、1904）、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第2巻（講談社 1977）（森）

#### 鷹山宇一（たかやま・ういち）1908～1999

1908（明治41）年12月10日青森県上北郡七戸町に生まれる。1922年に旧制青森中学校に入学し、翌年棟方志功・松木満史らが結成した「青光画社」に参加して絵を描き始めた。1927年中学校を卒業して上京、川端画学校に入学した。しかしこの年の9月に日本美術学校洋画科に編入学し、1930年に卒業した。その間、1928年の日本創作版画協会第8回展に木版画《魚》を、同年の1930年協会第3回展に版画と思しき《街景》と《角の食料品店》を、1929年開催の日本美術学校生徒習作展覧会に版画3点を、1930年1月の白日会第7回展に《プロフェール》《都会風景A》《都会風景B》（いずれも版画）を出品して、在学中から版画制作への積極的な姿勢を見せた。また、1930年1月開催の1930年協会第5回展に《鉄工場》を、同年2月の光風会第17回展に《坂下の家具店》を出品している。学校卒業後は、1930年9月開催の二科第17回展で《風景を配せる静物》《都会風景》の2点の木版画が入選したのを皮切りに、以後1937年の24回展まで毎回二科展に出品した。このうち1931年の第18回展には《ラリュヌサンボルエ》《街ノ上》《風景を配せる静物》《風景と鳥》の4点の木版画を出品し、石井柏亭に「注目すべきものだ」との評価を受けた（『美之国』7-10）。それ以外の二科出品作も版画が多かったと推定できる。1933年の日本版画協会第8回展にも会員として《清教徒の逃避》《美はしき天文学者の錯誤》《月光の廢碑》《月の形象》《静かなる祭典》を出品している。二科に初入選した1930年頃からシュルレアリスムに学んでマックス・エルンストの表現方法を研究、1933年に二科の新傾向の表現を志向する若手作家らとグループ「新油絵」を結成し、その第1回展を資生堂で開催した。1939年、同じく二科の急進的作品を制作する若手作家のグループ、九室会の第1回展に《作品A》《作品B》《作品C》を出品した。その後1940年の美術文化協会第1回展に《日高川〔民族ノ移動ノ内（情炎）〕》を出品し、以後、1943年開催の第4回展を除いて1944年の第5回展まで毎回出品した。1942年には新版画会のメンバーとして3点の木版画をこの会の展覧会に出品した。青森で発行された版画誌『陸奥駒』（1933～1935）にもしばしば版画を寄せた。戦後は二科に復帰、木版画から油彩画の制作へと転じた。1961年に二科の理事となった。1990年に七戸町名誉町民となり、1994年には七戸町立鷹山宇一記念美術館が開館した。1999（平成11）年10月25日東京で逝去。【文献】『鷹山宇一画集』（七戸町立鷹山宇一記

念館 1997) / 『日本美術年鑑 平成 12 年度版』(東京国立文化財研究所 2002) (滝沢)

#### 田川 憲(たがわ・けん) 1906～1967

1906(明治 39)年長崎市桜馬町に生まれる。本名は憲一。1924年3月に長崎市立商業学校を卒業。1926年に画家を志し上京、宮内省主馬寮に勤める。翌1927年に恩地孝四郎を知り版画制作を開始する。翌1928年川端画学校に入学しデッサン、油絵を学ぶ。しばらくは帰郷・上京を繰り返す、1933年長崎に戻る。翌1934年2月に『詩と版画』が創刊され参加する(「詩と版画の会」発行 編集兼発行:内堀周通)。その後「版画長崎の会」を設立。4月『詩と版画』誌を『版画長崎』と改題し、編集兼発行者となり、「版画長崎の会」より発行する。7月、「版画長崎の会」主催による「平塚運一氏作品並長崎版画及古代名作版画展覧会」を長崎県立図書館で開催すると共に、平塚運一を講師として迎え、版画講座を磨屋小学校でおこなう(本講座は翌1935年にも開催する)。この年、田川は積極的に版画普及活動に取り組み、長崎に創作版画運動定着の基礎が作られた。創作活動に於いても、9月には第1回版画集『新版長崎風景』をぐろりあ書房より刊行する。さらに同年には「第1回版画個展」を開催する。1935年第4回日本版画協会展や第10回国画会展に初出品をする。1941年に日本版画協会会員に推挙される。同年上海に居住する。この頃より「憲」と号す。同年4月に版画の個人雑誌『田川憲・木刻小報 龍』を刊行し、日本の創作版画を紹介する。次いで「上海版画協会」を設立(5月20日)し、版画講習会を開催する。また「版画研究所」の設立に参画し、事務所を北四川路に置く。本事務所は「上海版画協会」も共同使用とする。同年9月に中日文化協会が主催する版画講習会に講師として参加する他、1942年4月に日本版画協会上海展の開催に尽力する。また同年12月に創刊された『中国木刻』(中国木刻作者協会発行)に「木刻座右銘(一)」を寄稿する。1945年に帰国するまでの間、上海などに於いて、日本の創作版画の普及活動を積極的に努めると同時に『華中風物六景』《杭州西湖》《蘇州虎邱》等々の作品を制作する。帰国後、『海洋版画譜』を制作する。1949年『浦上原爆遺跡』を刊行。1952年第2回版画集『長崎詩帖』を刊行する。1956年長崎県より功労章を受章し、1960年長崎新聞社第1回文化賞を受賞する。1967(昭和42)年3月16日\*\*で逝去。作品は一貫して長崎の風景・風物を描き続け、それと共に、長崎の版画界の礎を築いた版画家である。【文献】『日本版画協会会報』35(1932) / 阿野露団『長崎を描いた画家たち(下)』(形文社 1988) / 阿野露団『長崎の肖像』(形文社 1995) / 『創作版画誌の系譜』(河野)

#### 田河水泡(たがわ・すいほう)

→高見澤路直(たかみざわ・みちなお)

#### 瀧 栄(たき・さかえ) 1914～1980

1914(大正3)年茨城県に生まれる。1915年宇都宮市大寛町に転居。1927年川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)に入学。在学中は美術サークル「パレット会」に所属し、上級生時には部長も務め、油彩画を多数制作する。そのほか、柔道部・バスケット部でも部長を努め、文武両道で中学時代を過ごし、特に美術と文学に熱中する。版画関係では、1928年に川上先生の版画ほしきから同校生徒の長谷川勝

三郎らが創刊した版画誌『刀』(1928～1932)の第2輯から作品を発表する。第2輯(1928)に《船》、第3輯(1928)に《林檎》、第4輯(1929)に《賀状》、第5輯(1929)に《真夏》、第6輯(1929)に《無題》、第7輯(1930)に《彩色人》、第8輯(1930)に《風景》、第9輯(1930)に《田川風景》、第10輯(1931)に《静物》、第11輯(1931)に《窓ノ木》、第12輯(1931)に《犬》を発表。特に一年先輩の佐伯留守夫が卒業した後の第11輯(1931)、12輯(1931)は実質責任編集者となり、『刀』の継続発行に貢献する。1933年から栃木県庁に勤める。1938年には応募され、終戦の翌1946年に復員。1980(昭和55)年逝去。生涯、版画や油彩画の制作を続けていて、彫刻刀は日本刀や刃物等を利用した手製のものを使用した。【文献】『版画をつづる夢—宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡—』展図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 瀧 秋方(たき・しゅうほう) 1902～1979

1902(明治35)年島根県大瀬町に生まれる。本名甚一、「稚方」とも号す。13歳の頃に水彩画を始め、上京して一時時期鎌木清方門下生となる。その後は川端画学校で学び、東京美術学校日本画科を卒業。池田伸博侯爵の後援を得、一時東京の新聞社に働くが、朝鮮美術への関心から職を辞して朝鮮へ渡り、1923年から1927年にかけて韓国・満州・中国・インドを旅する。4年ほどで帰国し、京都その後大阪に移り住む。1931年から1938年まで大阪毎日新聞社絵画囑託の仕事に携わる。1937年津田青楓・矢野橋村らによって設立された墨人会倶楽部の会員となり、1939年小杉放菴・渡辺大虚らと圏外社を主宰。戦後は中央画壇を離れ、岐阜県に移り住む。昭和30年代に奥の細道のスケッチをまとめた『奥の細道・車の旅 瀧秋方スケッチ集』(日研出版 1964)を出版。1979(昭和54)年4月16日名古屋市内の病院で逝去した。版画は、1936年に大阪の日月書院から刊行の木版画集『近代麗人画譜』《浅春》《明眸》《港の日本娘》《燭影》4点と《涼》《豊頼》(ローマ字タイトルでは「Hokyo」)合わせて6点が知られる。なお、『近代麗人画譜』の制作は、当時大阪在住の米国人ランバートとジャパントタイムス社の新渡戸氏の二人の発案で日月書院から刊行されたもので、1935年9月29日付ジャパントタイムス日曜版には、瀧秋方の紹介記事及び上記6点の木版画が図版入りで紹介されている。また、ランバートの尽力で同年10月にはアメリカのインディアナ州博物館でも展覧され好評を博したと伝えられる。【文献】「SHUFO TAKI, PORTRAYER OF THE MODERN WOMAN, PRESENTS HIS UKIYOE WORKS」『ジャパントタイムス 1935.9.29日曜版』 / 『日本美術年鑑』昭和55年版(東京国立文化財研究所 1982) / 「描かれた奥の細道～『奥の細道 車の旅 瀧秋方スケッチ集』原画展～」パンフレット(岐阜県池田町・土川商店「場所かさじゅう」)2013.7.20～7.31(樋口)

#### 多木透哉(たき・とうさい)

1922(大正11)年の神戸弦月画会主催の創作版画展(2.23～26 神戸・三宮三〇九番館)に木版画《へんな顔》を出品。出品時は神戸に住む。その後、1933年の第20回二科展に油彩画《雑花》が入選。以後、1943年の第30回展まで連続して油彩画を出品した。【文献】『神戸弦月画会主催創作版画展目録』(1922) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

### 瀧川七郎（たきがわ・しちろう）

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年学校の夏休みを利用してエッチング講習会を行った。1936年8月8・9日の2日間、関西小国民社に於いて開催された京都エッチング協会主催によるエッチング講習会（幹事：中井平三郎 講師：西田武雄）に参加。一人2枚の作品を制作。この時の作品と見られるアザミのエッチングが研究所機関誌『エッチング』第50号（1936.12）に掲載されている。この講習会の出席者には洋画家の須田国太郎や北脇昇も名を連ねていて、翌1937年8月7・8日開催の京都講習会（関西小国民社）にも北脇や小牧源太郎らと共に参加している。【文献】西田武雄「エッチング講習旅行記（3）」『エッチング』60（1937.10）／『エッチング』47・50・58（加治）

### 滝川太郎（たきがわ・たろう） 1903～1970

1903（明治36）年3月25日長野県松本に生まれる。1917年開智小学校高等科を卒業。1920年上京し、太平洋画会研究所に学ぶ。同年石井柏亭の書生となり、1921年からは石井の教える文化学院（同年4月創立）の図書館にも勤める。1925年応召。1927年に除隊し、同年の第14回二科展に油彩画《瞰望夏景》が初入選。以後、1930年の第17回展まで連続して出品。また、1928・1929年の中央美術展（第8・9回）などにも入選した。1930年渡欧（12月東京発、翌年1月パリ着）。パリに住み、1932年スイスのジュネーブに移る。滞欧中も1933年から1935年の二科展（第20～22回展）、1937年の第1回一水会展に出品した他、1936年には日本版画協会がジュネーブで開催した「日本の古版画と日本現代版画展」（ジュネーブ市博物館）に特別加入会員として参加。木版画《Paysage de Florence》を出品したが、この作品は現在知られている《フローレンス郊外風景》（1933）の可能性が高い。1940年帰国。帰国後は1940年から1943年の一水会展（第4～7回展）に出品。1940年の紀元2600年奉祝美術展、1941年の第4回新文展にも入選した。また、『エッチング』第95・97・98号（1940.11・1941.1～2）に「巴里十年」を寄稿。俳句も能くし、1944年には『玄鹿軒発句集』（兜屋画廊）を刊行。「太郎」「太郎左」「玄鹿子」などとも名乗った。戦後は、1946年の第8回一水会展に出品。会員となり、翌1947年には選出鑑別委員を務め、1970年の第32回展まで出品した。1970（昭和45）年12月21日神奈川県逗子市で逝去。翌年の第33回一水会展に遺作2点が並んだ。なお、滝川には、滞欧中や帰国後に滝川自身が描いたとされる所謂「滝川製ヨーロッパ絵画」の問題がある。その経緯は作品の所有者でもあった久保貞次郎の「真贋（6）滝川製ヨーロッパ絵画《体験の真贋論》」（『芸術新潮』1964年6月号）に詳しいが、その中で贋作とされていたセザンヌの《デッサン》が1992年に丹尾安典により「真作ではないか」（「贋作の名誉挽回!? 滝川製セザンヌ」『芸術新潮』1992年2月号）と指摘されるなど、未解決の部分もある。また近年、久保論文への反論の書ともいえる遺族・滝川留未子による『画家滝川太郎』（遊人工房 2005）が出版されている。【文献】滝川留未子『画家滝川太郎』（遊人工房 2005）／『日本美術年鑑』昭和47年版（東京国立文化財研究所 1973）／『日本版画協会々報』7（1936.2）／『ESTAMPES JAPONAISES : ANCIENNES ET MODERNES』展図録（1936）／久保貞次郎『久保貞次郎 美術の世界11 絵画の真贋』（叢文社 1984）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化

財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

### 瀧口綾子（たきぐち・あやこ） 1911～1998

1911（明治44）年生まれ。瀧口修造夫人。旧姓は鈴木。1934（昭和9）年4月の「新造型美術協会」の結成に参加。翌1935年の第1回展（1.10～19 東京府美術館）に油彩画《海のトルソー（A）》《海のトルソー（B）》（アラビアンナイト墜落）など10点（か）を出品。同年12月、瀧口修造（1903～1979）と結婚。1936年の第2回展（1.7～18 東京府美術館）には「鈴木綾子」の名で油彩画《風景》《作品》を出品。第4回展への出品は不明だが、1937年の第5回展（3.16～25 東京府美術館）には油彩画《アリス》《作品》、《フォトデッサン》、瀧口修造との共作《デカルコマニ》を出品。同年の『みづゑ』5月号（387）に《デカルコマニ》の図版2点が掲載された。翌1938（昭和13）年の造型版画協会第2回展（4.29～5.9 東京府美術館）にも《デカルコマニ》を出品。この出品について恩地孝四郎は、「版画の新しい分野を開拓する意志の下に結成されてゐる此会は、取材にもだが、技法の上に大膽な思ひ切つた遂行が成されてゐる」「版画の能力を拡大して行く意心〔ママ〕は尊重すべきであり、相当に成果を既に収めてゐる」とした上で、「ただ参考品ならいいがデカルコマニの展列は疑問とする。之は作の素因とはなり得ても「作品」ではないからである」（『展覧会評』『みづゑ』400）と評している。その後、1939年5月の「美術文化協会」の創立に参加。1940年の第1回展（4.11～19 東京府美術館）に油彩画《蟹気楼》《休みの日》、1941年の小品展（12.16～20 銀座・青樹社）に《小品》を出品したが、次第に制作から離れたようである。1998（平成10）年東京都で逝去。【文献】巖谷國士「瀧口綾子」（『瀧口修造小事典』のうち）『封印された星 瀧口修造と日本のアーティストたち』（平凡社 2004）／『造型版画協会第二回展目録』（1938）／恩地孝四郎「展覧会評」『みづゑ』400（1938.6）／『古沢岩見美術館月報 No.25 特集号 現代美術のバイオニア展』（1977.6.10）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

### 瀧澤好一（たきざわ・こういち）

プロレタリア美術運動に参加し、1932（昭和7）年の第5回プロレタリア美術大展覽会（11.18～27 東京自治会館）に版画《スターリン》を出品。【文献】岡本唐貴・松山文雄編『日本プロレタリア美術史』（造形社 1967）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

### 滝澤 茂（たきざわ・しげる）

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第1号（1933.8）に《夏》を発表【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

### 滝沢精一（たきざわ・せいいち）

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』の第1号（1934.9）に《バラ》、第2号（1935）賀状号に《猪》、第5号（1938.3）に《年賀状》《上木島》を発表。また、長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第2輯（1934）に《賀状》を発表している。なお、『葵』第5号は「瀧沢清一」の表記で発表されている。【文献】『須坂版画美術館 収

蔵品目録2 版画同人誌『櫟』『臥竜山風景版画集』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 滝沢英夫（たきざわ・ひでお）

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』の第1号（1934.9）に《月夜》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 瀧澤宗四郎（たきざわ・むねしろう）

長野での創作版画は、1933年に小林朝治が平塚運一を講師に招いて開催した「版画及び図画講習会」（須坂小学校）を契機として「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画誌『櫟』（1933～1937）を発行したことに始まる。1934年8月19日から22日には「第2回版画及び図画講習会」（講師：平塚運一）が須坂小学校で開催され、瀧澤も参加。その時に制作された作品は『臥龍山風景版画集』（信濃創作版画研究会 1934）として出版され、瀧澤の木版画《観音口》も掲載されている。その後、信濃創作版画研究会が発行していた『櫟』に参加し、第4輯（1934.11）に《竜ヶ池風景》、第5輯（1935.4）賀状号に《賀状》、第8輯（1935.12）に《校内》、第9輯（1936.4）に《賀状》を発表した。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 滝平二郎（たきだいら・じろう） 1921～2009

1921（大正10）年4月1日茨城県新治郡玉川村（現在の小美玉市）の農家に生まれる。県立石岡農学校在学中に風刺漫画と出会い、若林一男の主宰する茨城漫画派集団に参加、機関誌『漫画研究』を発行。1939年鈴木賢二や飯野農夫也を知り、すすめられて木版画に専心。翌年水戸市で開かれた第13回白牙会展に墨摺の《悪童と伝説》を出品。同年版画集『里の歌』『悪童物語』を制作。はじめ霞ヶ浦の周辺で厳しい労働に従事する人々に多く取材し、1942年第6回造型版画協会展に《わかさを獲る人々》《わかさを待つ人々》《わかさを焼く人々》を発表するも7月に応召、制作が中断。1945年沖縄で米軍の捕虜となり翌年帰郷、鈴木賢二や新居広治に誘われてその年のうちに「日本美術会」に参加し、中国木版の強い影響下に版業を再開した。1947年鈴木賢二や飯野農夫也が創刊した版画誌『刻画』の第1号に《母》を発表、自らも玉川村で刻画晴耕会を立ち上げ、機関誌『刻画晴耕』を版行した。同年12月の第1回日本アンデパンダン展（日本美術会主催）に《難民》2点（あるいは《沖縄難民A・B》）を出品、以後同展への発表を続ける。1948年「日本新版画懇話会」に参加、また現代中日版画展に《難民A》を出品。1949年には「日本版画運動協会」設立に参加、機関誌『版画運動』第1号に《若い農婦》を発表。同会が発行した『版画運動通信』『日本版画新聞』の編集も手がけた。1950年の第1回日本版画運動協会展に《牛の剪蹄日》などを出品。1951年には秋田の花岡事件に取材した版画集『花岡ものがたり』を新居広治・牧大介と合作、同年木版絵本『裸の王さま』を私家版で刊行。この年にはさらに大田耕士・新居広治・鈴木賢二と『版画四人集』を2集世にだしている。1954年に初の個展を水戸と日立で開催、翌年上京した。1955年北京で開かれた日本木刻展覧会に出品、千代田区立千代田図書館講堂における現代版画展に《農婦》を出品。1957年西野辰吉の新聞連載小説「種子は蒔かれた」の挿絵102回分を木版画で制作し、その後版画

をしばらく中断。1959年に集団・版第1回展に連作「汐」4点を出品、再開後は箔を使用するなど造形を変化させ、またこの頃から滝平調ともいべき豪快かつ素朴な作風を確立した。手法も初期の墨摺から多色摺へと展開し、1960年前後には小野忠重を思わせる陰刻多色摺の作品も発表している。1969年に第6回東京国際版画ビエンナーレ展へ大作《青い炎》《紅い炎》を招待出品、高評を得た。1960年前後から中国の剪紙に着想を得た切り絵を試み、木版に由来する黒を効果的に配した造形を模索、同時に子供を題材にした制作を始める。1969年に朝日新聞家庭欄での切り絵連載が始まって一躍人気作家となり、以後切り絵に軸足を移した。本の仕事も多く1950年代後半から児童書の装幀や挿絵を多く手がけ、はじめはこの分野でも木版を専らとしたが、やがて切り絵に移行。特に童話作家斎藤隆介と組んだ名作絵本を次々に発表、代表作に『ゆき』（1969年）や『モチモチの木』（1971年）などがある。2009（平成21）年5月16日千葉県流山市にて逝去。【文献】『滝平二郎版画集』（河出書房新社 1977）／滝平二郎「版画浪人」『版画藝術』30（1980.7）／『野に叫ぶ人々－北関東の戦後版画運動』（栃木県立美術館 2000）／『滝平二郎展』（郡山市立美術館＋福井市美術館 2013）（西山）

#### 田口省吾（たぐち・せいご） 1897～1943

1897（明治30）年5月秋田県角館に生まれる。父は評論家・小説家で、後に中央美術社をおこす田口掬汀。子息は小説家高井有一。葵橋洋画研究所に通い、1921年東京美術学校西洋画科卒業。安井曾太郎に師事する。油彩画をはじめ水彩画・版画・パステル画などを制作し評論も行う。第10回二科展（1923）に絵画《漁夫の娘》で初入選。その後も第12～16回展（1925～1929）に出品。1929～1932年渡仏。帰国した1932年には第19回二科展に滞欧作品21点を特別出陳。この年、二科会会員に推挙。以後、第29回展まで毎年出品。そのほか、中央美術展の第2～10回展（1921～1929）や第1回聖戦美術展（1939）、紀元2600年奉祝美術展（1940）などにも出品している。中央美術展覧会会友。版画制作については渡仏前に自刻木版を制作。父親の中央美術社から発行された美術雑誌『中央美術』（1915～1929）の第9巻2・4号（1923.1・4）、第11巻10・11・12号（1925.10・11・12）の表紙を木版画で飾っている。エッチングについては帰国後、日本エッチング研究所の西田武雄から研究所製プレス機を購入、当時まだプレス機の数少ない所有者の一人として、制作をはじめた。西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第1号（1932.11）に銅版画《カルタ》を発表し、第2号（1932.12）に「私はかねがねエッチングに興味をもち、何時か機会のある時、手をつけてみたいと思っていたが、（中略）巴里ではエッチングをやる機会を得られなかった」と「興味のある経験」と題した小文を寄稿。画家の中川紀元はその人物像について「資性〔ママ〕温厚よく人と和し、加ふるに眉目秀麗、举止端正にして正に貴公子の風がある」とし、現代美術のセンスを持つ新時代の画家であり、文学・音楽等すべての事柄に興味と理解を示す紳士であると記している（『中央美術』14～2（1928.2）。若い頃には幾度も大手術を受けたが最近では丈夫になったとも書かれているが、享年46歳で、1943（昭和18）年8月14日逝去。同年の第30回二科展に連作《絵を描く女》が展示された。著書に『西洋名画家選集』第5巻モデルアニ画集（アトリエ社 1932）の評伝がある。【文献】「二科会の新会友と受賞者」『中央美術』14-10（1928.10）／『日